

日本文学全集

3

竹取物語

伊勢物語

落窪物語

夜半の寢覚



竹 取 物 語
伊 勢 物 語
落 窪 物 語
夜 半 の 寢 覚

河 出 書 房 新 社

日本文学全集 3 竹取物語他

© 1960

編集委員

青野季吉 荒 正人
川端康成 瀬沼茂樹
中島健蔵

装 幀 者

原 弘

N D C

昭和 35 年 9 月 10 日初版印刷

昭和 35 年 9 月 15 日初版発行

定 価 290円

訳者代表 川 端 康 成

発 行 者 河 出 孝 雄

印 刷 者 中 内 佐 光

印 刷：暁 印 刷 株 式 会 社

製 本：株式会社小高製本所

本文用紙：王子製紙工業株式会社

同 納 入：株式会社大和屋洋紙店

クロース：日本クロス工業株式会社

同 納 入：株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291) 3721~7

振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

竹取物語	一
伊勢物語	四
落窪物語	一九
夜半の寢覚	二七
注 釈	池田弥三郎……五五
解 説	中村真一郎……五五

竹
取
物
語

川
端
康
成
訳

— かぐや姫の生い立ち

昔、竹取の翁おきなという人があった。野山にはいつて竹を取っては、それで籠かごなどを作り、生計にあてていた。名は讃岐造麻呂さぬきさうあそといった。ある日、そうして竹を取っていると、その中に一本、幹の光る竹があった。ふしぎに思つて近寄つてみると、その筒の中が光っている。さらによく見ると、その中に三寸ほどの小さな人がかわいらしくはいっていた。そこで翁は、

「わしが毎日朝夕に見る竹の中にいたのだから、そなたは当然わしの子になるべき人じゃ」

と言つて、その子を手の中に入れて家へ帰った。(翁が今ここで「そなたはわしの子になるべき人じゃ」と言ったのは、その『子』というのを『籠』にかけてあるのである。元来爺じいさんの職業は野山にはいつて竹を取つてその竹から籠などを作るので、その竹を取りに行つて『籠』ならぬ『子』を見つけたというわけである)

爺さんはそれを婆ばあさんにあずけて育てさせた。ところがその子の美しいこと——なにぶんにもひじょうに小さいので、籠の中に入れて育てた。

翁はこの子を見つけてからのちは、竹を取りに行くのと、よく、その竹の節ごとに黄金がはいっている竹を見つけたことが多かった。そこでしぜん爺さんは、だんだんと金持ちになつていった。

この子は、養ううちにすくすくと大きくなつていった。(それはちょうど若竹の子がすくすくと伸びてゆくようなくあいであつた) そうして三月ばかりもたつうちに、はやもう一人前の娘になつたので、髪上かみあげつまり、お下げを上げて髪を結い、そして、裳ももをはかせた。

翁は、それを家の中から外へも出さず、だいにじを重ねてかわいがり育てた。そのうちにこの子の容貌ようばうの清らかに美しくなつてゆくこと、そのために、家の中は暗いところもなく光り輝くようであつた。翁は、気分が悪く胸が苦しいようなときにも、この子を見るとしぜんその苦しさがなくなつた。またなにか腹の立つようなことがあつても、やはり慰められるのであつた。翁は、それからのちもなおずつと続けて竹を取つていた。その竹の中には節ごとに金かねがはいっているので、しぜん爺さんの家は今では富み榮えて豪勢な長者になつた。

その子がいよいよ大きくなつたので、爺さんは三室戸みむろど。

齋部秋田いんべのあきた*を呼んで、その名をつけさせた。秋田は彼女に『なよ竹のかぐや姫』という名をつけた。(かぐや姫とは『輝夜姫』、あるいは『赫映姫』で、夜もかがやく、あるいは照りはえるというような意味であろう)この名まえをつけた三日間というものは、翁は、祝いのために宴会を催して、いろいろの歌舞音曲をやり、男女を問わず人びとを呼んで大酒宴さかもちりをした。

二 妻 ど い*

天下の男という男は、高貴な者いやしい者も区別なく、皆一様にどうかしてこのかぐや姫を手に入れたいものだ、ひと目でもよいから見たいものだ、もうその評判を聞いただけで、うっとりとして心を燃やしていた。かぐや姫の家の近所の人や、またそのつい垣根かきね近くに住んでいるような人たちでさえ、なかなかちつとやそとの容易なことではかぐや姫の姿を見るところく眠らずに、きかないのに、それらの男たちは夜もろくろく眠らずに、闇やみの夜にやってきては垣根に穴などあけたり、また、あちらこちらからのぞき垣間見などしては、ひとり心をときめかせていた。このときから、こうしたことを夜這いはな*というようになったのである。けれども、人の居もしないところを闇夜にうろろ歩いてみたところで、いっこの効果ききめもない。せめては、姫の家の人たちに、なにか

ものでも言ってみようかと、言葉をかけてみるけれど取り合ってもくれない。それでもこりずに、その辺を離れぬ公達きんたつが、その辺をさまよっては夜を明かし日を送る者も多かった。

あきらめのいい人たちは、もはやしよせん望めぬものならば無用にうろつき回るのはつまらないことだと思ひ返して、来なくなった。ところが、そうした中でなおもつづけてやってきたのは、粹すみでとおっていた有名な五人——この人たちは、どうして思ひあきらめるところか、やはり夜昼なくかよってくるのであった。その名、一人は石作皇子いづりのみこ*、いま一人は車持皇子くるものみこ、もう一人は右大臣みぎのわら阿部御主人あべのみうし、他の一人は大納言大伴御行おのおののみなやみ、最後は中納言石上麻呂いしかのまろである。これらの人々は、つねづね世間にざらにあるような女でも、ちよつとその容貌かおたちがいいと聞くと、もうそれだけで、すぐそれを見たがるような人々だったので、かぐや姫の話を聞いては見たくてたまらず、飯を食うのも忘れて、物思いにふけり、その家に出かけて行つては近所をうろつき回ったが、いっこうにききめがなく、手紙を書いて出してもみたがやはり返事はなく、さては恋いあぐんで心さびしい歌など書いて送ってみたけれども、やはり答えはなく、もうこれはだめだと思ひながらも、やはり十一月十二月の候——雪が降り氷が張つても——またあるいは、六月の候——炎天のもと、雷鳴

の中をまかまわずに通いつづけてきた。そうしてあるとき、竹取の翁おきなを呼び出して、

「あなたの娘さんを、わたしにください」

と、手を合わせ頭を下げて頼んでみたが、翁はただ、

「わしの生んだ子ではないので、自由にはなりませんぬ」と言うばかりで、いつとなく月日が過ぎた。

そういうわけで、これらの人たちは家へ帰ってから妙に考えこんでしまつて、さては残念まぎれに、神仏にお祈りなどをし、あるいは願がんを立て、どうかしてこの娘を思いあきらめてしまおうとしたけれども、やはりそれはむだであつた。爺さんはあんなことを言つたが、しかしあの娘だつて一生涯婚を取らぬというわけではなからうなどと、また思い返してはそれをあてにした。そして、これでもか、これでもかと言わんばかりに、自分の氣もちの深さを見せつけるかのように、姫の家の近所をやはりうろつき回るのであつた。

あるとき、竹取の翁はそれを見て姫に言うのに、

「うちのだいじなだいじなお嬢さま——（というのは、

この姫が見つかつてから竹取の家は富み、今ではその姫の美しさが翁にとってはこの上ない楽しみになっているので）——あなたはもともと、神か仏のお生まれかわりで、この爺めがお生み申した子ではありませんが、しかし爺が、あなたをこれほどまで大きゅうお育て申し上げ

た心もちをどうかおくみ取りくだすつて、爺の申すことを一つお聞き取り願えませんか」

そう言うとき、かぐや姫は、

「あら、どんなことでもおきき申しますが、わたしが變化へんの者などということは、今の今までつい知りもしませず、わたしは、ただもういちずに、あなたを生みの親だとばかりぞんじておりましたわ」

翁は、

「そりや、ありがたいことじゃ。わしももう、年が七十の上になりました。実を言へば、わしはもう、今日とも明日ともしれぬ命ですわい。そこで言うておきますが、およそ人間というものは、この世に生まれた以上は、男は女と結婚するもので、また女は男と契ちぎるもののなのじや。これが人間の規則おきてというもののなのじや。またそうしてこそ、はじめて一家が榮え、一門がふえるというものののですわ。たといあなたといえども、やはりどうしてもその同じ道を踏まねばなりませんぬのじや」

それに対して、かぐや姫は言つた。

「だって、どうしてそんなことをするのですの。わたし、いやですわ」

翁が言つた。

「いやいや、あなたはたとい、もとは神仏のお生まれかわりであろうとも、ともかく、あなたは女のからだじゃ。

今は、こうしてわしが生きておりますかぎりは、このままでもよろしかろう。が、わしが死んでしまいましたが、どうなさる——ところで、あの五人の方々は、あのとおり長い間、年を経、月を重ねておかよいになり、あなたを思うお志も深く、そのうえに、あのようにおっしゃるものを、あなたも早くお心をお決めになって、あのうちのどなたかお一人にお契りになってはいかがですか」

すると、かぐや姫は言った。

「いいえ、よくもない器量ですのに、うっかり相手の方のお心も知らず契りましては、あとになって、その方のお心変わりがしましたときに、ただもう後悔いたすばかりだろうとぞんじますわ。どんなに位の高い、ごりっぱなお方でありましようと、そのお方のお心の深さも知らずに、お契り申すことはできません」

「ああ、よくぞおっしゃいました」

と、竹取の翁は感心して言った。

「そこで、いったいあなたは、どのようなお心の方にお契りになろうとお考えになりますか。だいたい、あの五人のお方は、どなたも皆それぞれにお志の深いお方ばかりですが」

かぐや姫は言った。

「どのような心のお方って——別に、何もたいして特別のことは申しませんわ。ほんのちょっとしたことなので

す。だいたいあの五人のお方々は、どなたさまも皆、お志の深さはおんなじことですね。どなたさまがすぐれ、またどなたさまが劣るということなど、どうしてございましょう。ですから、わたし、皆さんの中で、いちばんわたしの見たいものを見せてくださったお方に、その方のお志が特別深いものとして、そのお方さまの妻になりますわ。どうか、そうおっしゃってくだされませ」

「それは、よいお考えです」

と、翁もそれに賛成だった。

さて、日が暮れて、れいの五人は集まってきた。それらの人々は、ある者は笛を吹き、またある者は歌をうたい、ある者は唱歌をし、ある者は口笛を鳴らし、そうしてまたある者は扇で拍子をとったりなどして、そういうふうにして、姫を誘い出そうとしていたところへ、翁が出てきて言うのに、

「さて皆様、皆様は、もったいなくも長ながの年月、よくもこんなきたならしいところへおいでくださいまして、恐縮にぞんじております。わたくしの命も、もう今日明日ともしれませぬのに、このように御親切に言ってくださいる皆々様の御うち、どなたかお一人に、よくよく思い定めてお仕え申してはいかがと、わたしから姫に申しましたところ、姫は、でも深いお心を知らねば、と申します。それもそうにちがひございません。そこで姫が申し

ますのに、五人のお方々は皆どなたさまもお志にまさり劣りのあるはずはございませんで、その中で、姫のいちばん見たいとぞんじますものをお見せくださいました方に、その方が、いちばんお志が深いものとして、お仕え申すことにきめようというのでございます。それならば、このわたくしもけっこうだとぞんじますし、また、どなたさまにいたしきしても、その恨みを買うことはなからうとぞんじます」

そう言う、五人の人々も、

「それはいい」

と答えたので、翁は中へはいって、姫にそれを伝えた。

かぐや姫は、

「石作皇子には、天竺に仏の御石の鉢というものがございます。それを取ってきていただきとうございます」

と言ひ、

「車持皇子には、東海に蓬萊の山という山がございます。その山に、根が銀ででき、茎が金でできていて、その上に白い玉が実になってゐる木がございます。その一枝を折ってきていただきとうございます」

そう言う、なおつづけて、

「いま一人のお方には、唐土にある火鼠の裘がいただきとうございます。大伴大納言には、竜の首にある五色に光る玉——それがいただきとうございます。石上中納

言には、燕の持つてゐる子安貝——それを一つ、取ってきていただきとうございます」

と言うのであった。

翁は、それを聞いて、

「ああ、難題ですわい。それらはみな、この国にあるものではない、そのようになむずかしいことを、いったいどう言つて伝えたらよからう」

と、困った。すると、かぐや姫は、

「なにが難題です」

と、それに答えて言つた。

「いや、ともかく、そう申してみましよう」

と、翁は、そこで外に出て行つて、

「こういふ次第でございます。姫の申しますとおりに取ってきていただきましよう」

そう言つたので、皇子たちや上達部たちは、それを聞いて、驚きあきれて、うんざりとして、

「そんな難題を言うのなら、いっそなぜ、この近所も歩いちゃいかんと、そうあつさり言わないのだ」

と、捨てぜりふを残して、帰つて行つた。

三 仏の御石の鉢

とは言へ、いったんそうして帰つて行つたものの、やはり姫を見ないではこの世に生きてゐるかいもないよう

な気がしたので、石作皇子は、なかなか心たくみのある人で、天竺にあるものなら、どうかして持ってこられないこともあるまいと思ひめぐらしたが、しかしまた思い返してみると、その遠い天竺にも、一つあって二つとなつたものを、たとい千百万里も行ったところで、どうして取ってくるのができようかと、彼はある日、かぐや姫のところへ、今日こそ、これからわたしは、天竺へ御石の鉢を取りに行くと言へておいて、それから三年ほどたつて、大和国十市郡のある山寺にあるお資頭鷹の前の鉢が、すすけてまっ黒になっているのを取ってきて、それを錦の袋に入れ、その上に造花の枝を添えて、かぐや姫のところへ持ってきて見せた。かぐや姫はふしぎに思つて、それを見ると、鉢の中に手紙がはいっている。ひろげて見ると、

海山の路に心を尽し果て

御石の鉢の涙流れき

(あなたの御注文の仏の御石の鉢を取りに、天竺まで、海山千里の道を心のありたけをつくして、苦勞をして取りに行ったので、私は實際血の涙が流れた。と、御石の鉢のちを血にかけて歌ったのである)

かぐや姫は光があるかと、その鉢を見ると、螢ほどの

光もない。そこで歌い返して、

おく露の光をだにもやどさまし

小倉山にてなにもとめけん

(仏の御石の鉢というならば、せめてほんの草葉の上におく露ほどの光でもあつてほしいものだ。ところが、こんなまつくろけな鉢を持ってきて、あなたはたぶん、それをあの暗いという小倉山かどこかで捜してきたのだろうが、こんなものを、いったいなんだって持ってきたのだ。小倉山は、ちょうど大和国十市郡にある倉梯山の峰の名で、石作皇子がこの鉢を捜してきた所と一致しているのが妙味)

そう言つて、鉢を返されたので、皇子はその鉢を門の前に捨ててしまつて、さてまた返歌をした。

白山にあへば光のうするかと

鉢を捨てても頼まるるかな

(いや、あなたのような美しい人に会つたので、たぶんこの鉢も光を失つてしまったのでしょう。わたしは鉢を捨て、恥を捨てても、まだあなたにお望みは捨てません。小倉山と言つたから、それに対して白山と返したのである)

そう詠んで、それを姫のところへ送り返した。しかしかぐや姫は、もうそれには返事もしなかった。皇子の言葉に耳に入れてもくれないので、ぶつぶつ言いながら帰って行った。いったん鉢を捨てておいて、まだその上に性懲りもなく、まかりよければと、さらに言い寄ったので、それからそういうふうにいけずうずうしいことを、恥を捨て——（鉢を捨てて）とはいうのである。

四 蓬萊の玉の枝

車持皇子は、思慮の深い人であって、公儀には筑紫の国（九州）へ湯治に行つてまいりますと言つて、お暇をちょうだいして、かぐや姫の家へは、

「これから玉の枝を取りにでかけます」

と、そう使いの者に言わせておいて、九州をさして下向すると、仕える人々は皆、皇子を見送つて難波の港まで来た。皇子はそこで人々に、

「ごくないしよに行くのだから」

とおっしゃつて、人もたくさん連れて行かれず、まったくのお側近だけをお連れになつておたちになった。お見送りの人々は、それを見送つておいて京へ帰った。

さて、こういうふうにして、世間へはちゃんと筑紫の国へ行ったようにお見せかけになつて、それから三日は

どして皇子は、また難波の港へ船でお歸りになった。かねて用意万端ちゃんと手はずが決めてあつたので、さつそく当時第一流の工匠である内麻呂ら六人をお呼び出しになつて、なかなか容易なことでは人々の近よれそうもない家をお造りになり、その家のかこみを厳重にして、中にその六人の工匠たちをお入れになつた。御自身もまた、その中にはいられたのである。そうしてそのうえにまだ御自身が御知行になつてゐる土地十六カ所の莊園を神に御寄進なされ、その神の援助によつて玉の枝を作り始められたのである。それは、姫が注文したのと寸分たがわぬものにできた。皇子はそれを、人に気づかれぬようにこっそりと難波の港に持ち出した。そうして御自分もまたちゃんと船に乗られてから、さて「ああ、今歸つてきた」と、はじめて自宅のほうへお知らせになつて、見るからに長の船旅で疲れたような苦しい顔をしていられた。たくさんの人々が迎えにやつてきた。

皇子は、その玉の枝を長櫃の中に入れて、その上におおいをして持つていらつしやる。そのことを、いつのまにか世間では噂に聞いたのだから。「車持皇子は、優曇華の花をお持ち歸りになつた」と、ひじょうな評判になつた。これを聞いてかぐや姫は、わたしはこの皇子には負けるのではないだろうかと、まったく胸のつぶれる思いであつた。

そうこうするうちに、門をたたいて人が訪れて来た氣配がする。車持皇子がおいでになったとのことである。まだ船路の御旅装のままだというので、とりあえず翁が
出してお会い申した。

「命を捨てて、この玉の枝を取ってきた」と、皇子はおっしゃって、

「さっそく、かぐや姫のお目にかけていただきたい」

翁はそれを持って中はいって行つた。見ると、この玉の枝には次のような歌がついている。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を

手折らでさらに帰らざらまし

(たとい自分は、どのような苦勞をして身を投げ出そうとも、どうしてあの御注文の玉の枝を取らずには帰つてこようか。これ、このとおりかならず取つてまいる。ちやうどそれと同じように、やはり自分は今あなたをもらわねば、なんと言つても帰らない)

玉の枝も玉の枝だが、この歌もまたこの歌で、なかなか氣もちがしっくりしていると、姫はぼんやりと物思ひにふけているところへ、竹取の翁ははいつてきけるに、

「ほれ、この皇子にお申しつけになった蓬萊の玉の枝

を、皇子はこれのとおり、一つの不審の打ちどころもなく、まったくおまちがいなくお持ち歸りになった今、もはやとかくのは申し上げるべきではござりませぬ。しかも皇子はまだ旅のお姿のまま、御自宅のほうへもお歸りになりませず、直接にここへおいであそばしたのです。さあ、姫も早くお出ましになって、あの皇子さまにお会いなされて、お契りなされませ」

そう言うのを聞いて、姫はじつとだまって物をも言わず、ただ頬杖をついて、深くため息をつきながら物思ひに沈んでいた。

皇子は皇子で、もうこうなつては、姫だつてなにも言うことはなかりうと、ずんずんと遠慮なく縁側の上へお上がりになる。翁は、それもむりのないことだと思つて、そして姫に向かつて、

「この玉の枝はわが日本では見られないものです。もうこんどというこんどは、おことわりするわけにはゆきませぬ。それに、あの皇子さまのお人柄もまた、なかなかいいかたでいらつしやるし」

などと言っている。かぐや姫は、

「わたしは親の言うことをただいぢずにおことわりするのがお氣の毒さに、わざと取れそうもないものを欲しいなどと言つたのに、それをまあ、思いがけなく持つていらつしやるとは、いつそ口惜しゅうございます。まあど

うしたらいいのかしら」

と、困っているが、翁はそれにはかまわずに、はや聞きこしたくなどをしている。翁は皇子に向かって言うのに、「いったい、どんなところに、この木がございましたのでしょうか。まったくお珍しい美しいけっこうなものでございますが」

皇子はそれに答えておっしゃった。

「いやさ、一昨さきおととし昨年の二月ごろ、わしは難波の港から船出をしましたな、はじめのうちは海の中へ出てみると、いったいどちらの方角へ向けて行っているものやら、それさえわからず、まったく心もとないしだいでしたが、な、しかし、この一念思い遂げられずば、もはやこの世に生きてなんになろうと思ひ定めましてな、ただあてもなく風にまかせて漂うておりました。死んでしまえばそれしかたがない、けれども、こうして生きておる限りは、いつかは蓬萊の山とやらに出会うこともあるかと、そう思ひましてな、方々を漂流して、しまいはわが日本日本の国をも離れて遠方を航海していました。あるときは波が荒れて、そのために船が海の底にも沈没するかと思われたり、またあるときは、風に吹かれて見知らぬ国に吹き寄せられて、そこで鬼のようなものに出てこられて、殺されかかったこともあります。あるときはぜんぜん方角がわからなくなつて、まったく海の迷子まごになつた

こともあります。またあるときは、食物がなくなつて草の根を取つて食つたことさえあります。あるときは、なんとも言いようのないぶきみなやつが出てきてな、こちらに食いつこうとしたこともあります。あるときはまた、海の貝を取つてそれで命をつないだこともあります。旅の空で助けてくれる人もないところでのいろいろの病氣をして、それから先のこともわからず実に心細い思いをしたこともまたありました。そういうふうにして、ただ船にまかせまして海に漂うこと五百日——その五百日目の朝の八時か九時ごろのことでした。ふと海の中に、はるか向こうに山が見えます。ただもう夢中に喜んで、船の中からその山にながめ入つてしまいました。するとその山はなかなか大きい。海の上に浮いているのですが、その山の高さも高く、またそのかつこうもなかなか美しいのです。そこで、これこそわが求めていた山かと、いちじはぞつとするほどうれしく思ひましたが、な、何ぶんにもさすがにおそろしくもあるので、そのままその山の周囲を二三日もこぎ回つてながめておりました。するとある日、天人の装いをした若い女が山の上から出てきてな、銀のお碗で水をくんでいるのです。そこで、わたしたちも船からおりましてな、その女に向かって、『この山の名はなんと申す』と尋ねますと、女が答えて申しますのには、『これは蓬萊の山です』と、

そう言うのです。さあ、それを聞いたときのうれしさと
 いったらありません。わしは女に向かいまして、『そな
 たはなんとおっしゃる』とききますと、女は『わたしの
 名はほうかんり』^{*}そう言つてそのままぶいと山の中
 にはいつてしまいました。

——さてその山といたら、まるで登りようもないほ
 ど険しいものなのです。わしはその山の周囲のがけふち
 を歩いてみましたが、この世に見られぬ珍しい花の木が
 多く、金銀瑠璃色の水が山から流れ出しております。ま
 たその川には、いろいろの美しい色の玉の橋がかかつて
 いる。周囲の木は皆光り輝いている。そういう中で、今
 このわしの取つてきたやつは、どちらかといえはあまり
 バツとしないほうのやつでしたが、しかしかぐや姫がお
 つしやつたのと違つてはなんにもならぬと考えまして
 な、それでこれを折り取つてきたのです。ところで、そ
 の山の景色といたら、まったくくらべようもない絶景
 で、わしは元来ならもっと長くそこにとどまつてそれ
 をながめていたかったのですが、何ぶんにもこの花を取
 つかつてからは気がでなく、いそいで船に乗つて帰つて来た
 というわけなのです。幸いに追風が吹いて、四百日あま
 りで帰つて来られました。これもまったく大願力のおか
 げでしょう。難波の港から昨日帰つて来ました。まだ潮
 にぬれた着物も取り換えもせずに、さっそくこちらへや

つてきたというわけなのです」
 これを聞いた翁は感嘆して、深いため息をついて次の
 一首を詠んだ。

呉竹のよよの竹取る野山にも

さやはさびしきふしをのみ見し

（わたしも長年、竹取りの業をして、野山でずいぶん
 つらい思いもしましたが、しかしそんなにも困難な思
 いに出会つたことはまだ一度もありませんでした。

「ふし」は竹の節と、おりふしなどのふしにかけたも
 の。よよの竹取るの「よよ」は、代々と竹の節々にか
 けたもの。そして「呉竹の」は、よよの枕言葉である）

皇子はそれを聞いて、

「ずいぶん長い間、思い悩んでいた私の心も、今日はや
 つとおちついた」

そう言つて、

わが袂けふかわければわびしさの

千草のかずもわすられぬべし

（長い間の恋しさと苦しさで、わたしはまったく泣き
 の涙で暮らしてきたが、今日はやっと姫に会えること
 になったので、その涙の露にぬれたこのわたしの袂

も、どうか今日はかわいたというものだ。そうしてまた、いろいろのつらいこともどうやら忘れられるというものです。千草のかずは、千草は、千種で、いろいろさまざまの、かずと言ったのは草と言ったからそのかずという意味)

そう返歌をした。

こうして、この皇子の場合、すべてはうまくゆきそうであつたが、ここに突然、男たちが六人連れ立ってやってきて、それが姫の家の庭へはいってきた。その中の一人が、棒のさきに文をはさんでさし出して言つたのである。

「細工所の細工人の頭、漢部内麻呂が申し上げます。玉の木を作りますについては、わたくしら粉骨碎身五穀をたちまして奉仕いたしましたこと、ここに千有余日、その間力を尽くしましたること少なくともござりませぬ。しかるに、いまだそのお給金をちょうだいいたしておりませぬ。これをちょうだいいたしまして、さっそく家の子一統に分ち与えたいとぞんじまする」

竹取の翁はびっくりして、首をかしげて、

「この細工人らが申すことはいったい何事でございますか」

皇子はあわてふためいて、魂も消え入るばかりであつた。

かぐや姫はそれを聞いて、
「その申し文をお見せください」
そう言つてその手紙を受け取つて見ると、それには次のように書いてあつた。

「皇子さまには、われわれ卑しい細工人とともに同じ場所にお隠れになること千余日、その間、りっぱな玉の枝をお作らせになつて、それができあがつたときには、われらにお給金はもちろん、官職をもおさずけくださるのお話でございました。これをただ今になつて考えてみまするのに、これはやがて御側室にならせられるところの、このかぐや姫の御入用のものと承りまして、それをこちらのお宅からいただくのがあたりまえかとぞんじまして、それで、ただ今いただきにまいりました」

これを見るとかぐや姫は、おりから暮れかかる夕暮れのように思い悩んでいた顔が、急にひらけて、にこにこと笑い出し、いそいで翁を呼んで言うのには、

「ほんとうの蓬菜の木かとばかりわたしは思つて、困つておりました。でも、そうでなくてうれしゅうございします。こんなあきれたにせ物を持つていらつしやるとは、さあ一刻も早くあのお方をお帰しになつてください」

翁も、

「こうとはつきりにせ物だとわかつてみれば、もう、あの方を追ひ帰すことなんかわけはない」